2023年3月19日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

『神託』が聞こえるか

［ルカによる福音書20章9～19節］

「イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

［1］　「主人」不在の世界の中で

早いもので、もう3月も後半に入り、2週間後には新年度4月を迎え、3週間後はイースターになるのですね。今は、教会歴では「受難節」の中にありますが、本日開かれた聖書箇所も、イエス様の十字架の出来事が迫っている時に話された譬え話です。聖書には「ぶどう園と農夫のたとえ」と小見出しがついています。

この譬え話、皆さんよくご存じだと思いますが、とてもキツイと言いますか、厳しい内容の譬え話ですよね。これだけ厳しい内容の譬え話は珍しいとさえ言えると思います。ここで登場する酷いことをしたぶどう園の農夫たちは、皆主人によって滅ぼされてしまう、ということが言われているのですから。けれども、それでこの譬え話が終わっている訳ではありません。それで終わりであったら、よく言います「自業自得」だとか、「自分の蒔いた種だ」とかそういう話になってしまいます。しかし、それが主眼ではないのだなと改めて読んで思いました。これは「愛の物語」だ、本当に純粋な、「愚か」と言っても良いほどの愛の物語だ、しかもそれを語られたイエス・キリストはご自分の存在すべてを懸けて語っておられるように思えてしょうがありません。

このイエス様の譬えを聞いた人たちは、途中まで聞いて「そんなことがあってはなりません！」（ルカ20：16）と言ったと書いてあります。確かにそれほど言語道断な内容の話をイエス様はされたのです。

ある人がぶどう園を作り、それを農夫たちに貸して、自分は‟長い旅”に出たというのですね。農夫たちはぶどう園での仕事を託されました。そして収穫の時がやって来て、まだ旅に出ていた主人は、自分の僕をそのぶどう園に送って、収穫を渡すように言わせたのです。普通ならば、はいよっというようにそれを渡す訳ですが、この収穫を取りに来た僕を袋叩きにしてしまったと言うのですね。あり得ない話です。しかし、更にあり得ないのは、このぶどう園の主人は、違う僕をまた送ったというのです。ハラハラしますよね。すると、その僕も袋叩きにあい、侮辱されて追い返されたというのです。そして、更にこの主人は、違う僕を送るのですが、案の定また暴力を振るわれて放り出されてしまいました。

ここに至って、ぶどう園の主人はやり方を変えるのです。その方法というのがまことに私たちの理解を超えています。こう記されていました。13節以下をもう一度お読みします。―「そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。」

これはもう無茶苦茶ですね。「愛する息子」をこの段階で送るというのは一体どういうこと？と思ってしまいますし、その息子は袋叩きどころか殺されてしまったのですから。農夫たちは相続者が消えればその財産は自分たちのものになると思ったようです。奇妙な話とも言えますが、私が読んでいて恐くなるのは、いとも簡単に自分たちの都合のみで暴力がふるわれたり、殺人が行われているということです。イエス様からはこんな話は聞きたくないと私たちは思うかもしれません。しかしどうでしょう？こういう「ひどい話」というのは、実は日常茶飯事ではないでしょうか？―曰くこの世界は強い者が生き残るのだ、私たちは自分たちを脅かすものを跳ね返す腕力と知恵を持たねばならないと。とても今日的ではないでしょうか。今、この世界は「疑心暗鬼」に満ちていると言えるのかもしれません。問題は、なぜこんな世界になってしまっているのか、ということです。それはある意味ハッキリしているように思います。「主人」不在なのです。長旅に出て、留守の状態です。主人の顔が見えないところで、我が物顔で生きているのです。「主人」は神様です。その神様が不在。神は死んだ。この世界は我らのもの、と。この段階で、世界が破壊され、人間が破壊されています。これが今の世界の現実です。根本は人間が神から離れている、ということですね。

しかし、主人は、旅をしていましたけれども、戻って来るのです。そしてこの不条理や不正に決着を付ける時が来ますよ、と言っています。「審判」の時は訪れ、この農夫たちは皆放り出され、殺され、他の者たちにぶどう園を任せようということになります。

[2] イエス様と「隅の親石」

しかし、ぶどう園は、このままではダメですよね。民衆たちも「そんなことがあってはなりません」と言いました。そこで何がなされたのか。17節「イエスは彼らを見つめて言われた」とあります。「見つめ」ながら大事なことを語られる。私の言うことをしっかりと聞けと。こう言われました。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』 隅の親石とは、英語では‟コーナーストーン”。家を作る時の土台石です。「こんな石捨ててしまえ」と言って排除した石、つまり先ほどの話で言えば、主人の愛する息子ですが、その殺された彼こそが新しい家を支える親石となるのだと、イエス様は、ご自分のことを言われたのです。ここにあるのは何かといえば、わたしがあなた方の代わりに審きを受けるから、あなたたちはもう一度、神を不在とせずに、神をなきものとしないで、正しく生き直せ！とおっしゃっているのではないかと思います。これは、途方ない愛です。神が人間の滅びを引き受け、人間の罪は赦され、新しい「ぶどう園」をむしろ委託されるのです。

[3] このぶどう園の中で神託に応えよう

「ぶどう園」、それは大きく見れば、この世界全体でしょう。この譬え話で私が特徴的だなと思ったのは、この主人の、雇い人への信頼です。そうでしょう？農夫たちを信頼しているからこそ長い旅に出るのでしょう。ちゃんやってくれると。ところがちゃんとやってくれませんでした。むしろ主人が送った僕をボコボコにしましたね。にもかかわらず、まだ主人は雇い人を捨てないのです。最後の切り札である自分の息子を送った。「この子なら敬ってくれるだろう」と。この時の主人の愛は、人間的にはまことに愚かに見えます。それは危険だよ、そこまでする必要ないよ、と言いたくなります。けれども、主人は農夫たちが好きなのです。「信頼」しているのです。聖書が語る信仰というのはこれなのだなと思いました。まず神の愛があって、ぶどう園を託されるのです。本当の意味の“神託”です。私たちがではなく、神様が託して下さる。この譬えで、主人は人間を諦めていないことがよく分かりますよね。まず送った僕たちは預言者たちでしょう。そして、最後に愛する独り子イエス様を送られました。しかし、主人（神様）はどれほど忍耐されていたことでしょう。どれほど痛みを負ったことでしょう。愛は、苦しむことです。「私たちが神の子と呼ばれるために、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えて見なさい」（ヨハネの第一の手紙3:1 口語訳）。本当にそうです。

今日、私たちはこのあと教会の定期総会を持ちます。「教会」もまたぶどう園です。主イエス・キリストが、土台石となってこの教会を支えていて下さっています。不信仰な私たち、“神など要らない”“もう神様に合わせる顔がない”などと、自分の思いで神様から離れようとする私、また私たちかもしれません。しかし、自分で自分の信仰を計ってはいけないと思います。それは神様から引き離す罠です。私たちはどんな時も、神様に真向かうことが出来るのです。何故なら、私たちのことを神様は見捨てず、むしろ抱きしめるようにして、主イエス様を送って下さったのですから！主は今日も十字架の上からみ腕を拡げ、私たちを受け入れ、‟わたしはお前が好きだ、わたしのぶどう園をよろしく頼む、あなたの家庭の中にわたしはいる、あなたの教会の交わりの中にわたしいる。さあ私と共に進もう”と絶えず招いて下さっているのではないでしょうか。与えられているそれぞれの「ぶどう園」の中で、主の「ご神託」にご一緒にお応えしてまいりましょう。主が私たちに信頼を置いて下さっているのですから！お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日の礼拝をありがとうございます。この世界の現実は複雑のようでいて、実はとても単純なことなのかもしれないと思います。あなたなどいない、要らないと言って生きるか、あなたとの関りの中で生きて行くかです。主よ、まずあなたが私たちを愛して下さいました。その事実をしっかりと受け止めさせて下さい。わたしと一緒になって、実を結ぶ世界を作って行こう、と呼びかけて下さるあなたのお声を聞き、シンプルに従って行くことが出来ますように。私たちのこの川越教会も、あなたのぶどう園として共に歩ませて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります、アーメン。